



Title	中動態としてのフランス語代名動詞－ 再帰・自発・受動 －
Author(s)	井口, 容子
Citation	大阪大学, 2026, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/105772
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論 文 内 容 の 要 旨

氏 名 （ 井 口 容 子 ）	
論文題名	中動態としてのフランス語代名動詞 — 再帰・自発・受動 —
論文内容の要旨	
フランス語の代名動詞は、再帰の接語代名詞のseに動詞が後続する形態であるが、ドイツ語の再帰動詞などと並んで、中動態(middle voice)を形成するものと考えられている。本来「再帰」を表していた構文もしくは形態が、いわゆる「中動」のカヴァーするさまざまな意味領域に及んでいく現象は、様々な言語においてみとめられるが、この過程は「再帰reflexive」→「中動の中心的領域（身体動作の中動body action middleなど）」→「自発spontaneous middle」→「受動passive middle」という順を追って、漸次進行していく（Kemmer(1993), 柴谷(1997)等）。この機能拡張のどこの段階に位置するかは、言語によって異なるが、フランス語の代名動詞（再帰動詞）の場合、再帰から受動に至る、かなり充実した中動の体系を築いていると言っていることができる。さらに代名動詞は、このような類型論的な興味に加えて、総称性、叙述の類型、モダリティ、非対格性など、言語学におけるさまざまな興味深いテーマと密接なかかわりを持っている。本論文はこのような観点から、フランス語の代名動詞を分析したものである。 特に注目したのが「自発」と「受動」の用法である。「自発」の用法は、従来「中立的代名動詞」と呼ばれていたものであるが、「使役交替causative alternation」における自動詞形態（「反使役anticausative」形）に相当する。次の(1)のような文が代表的用例となる。 (1) Le verre s'est cassé. 「コップが割れた」 一方、「受動」は(2)のような文に代表される用法で、従来、英語やドイツ語などにおける「中間構文middle construction」に相当するものと考えられてきた。 (2) Ce livre se lit facilement. 「この本は簡単に読める」 しかしながらフランス語の受動的代名動詞には、上記の典型例のようなものばかりではなく、中間構文とは異なる性質のものが少なからず存在することが指摘されている(Fagan 1992, Yamada 2002等)。「自発」と「受動」の関係、特にその拡張の過程の探索は、本論文を通じて根底に流れているものである。 本論文は三部から構成される。第1部においては、まずKemmer(1993)の分類に従ってフランス語の代名動詞の諸用法を分類し、それぞれの機能を概観した上で、「再帰標識の機能拡張」という観点から分析した。第3章、4章においては、従来「受動的代名動詞のアスペクト制約違反」とみなされてきた事例のうち、二つの下位クラスを抽出し、これらは「自発」と「受動」の境界の事例であり、知覚動詞・認知動詞の代名動詞からなる一方のクラスにおいては、その語彙意味論的な特殊性のため、もう一方のクラスにおいては「完了性」を示唆するコンテキストのため、対応する他動詞の外項に相当する人物の存在を含意しながら、自発的な意味を表し得ているものであると主張した。いずれの場合にも対照言語学的な視点も取り入れて考察を行った。第5章においては、ヴォイスとしての機能拡張に主眼をおいた近年の研究では扱いが小さくなっている傾向にある、「間接的中動indirect middle」をとりあげ、再帰代名詞のseが与格を担う、譲渡不可能所有者構文における代名動詞について考察した。 第2部においては、「自発」用法の形態的側面と意味の関係に注目した。フランス語において、使役交替における自動詞形態には、再帰形態（ex. se briser「壊れる」）と、非再帰形態（ex. fondre「とける」）があることが知られている。先行研究のうち、Doron et Labelle(2011)等はこの形態的（および統語的）対立は、意味的相違に対応するという立場を取るが、Martin and Schäfer(2014)はそのような対応はないとする。これらを検証した上で、本論文においては、従来の「内的原因」という概念はあまりに大きすぎるくくりであることを指摘し、下位区分を設けることを提案した。これによりMartin and Schäfer(2014)の主張とは異なり、再帰形自動詞は外因的事象、非	

再帰形自動詞は内因的事象という対応関係を示すことができた。

このようにして重ねてきた分析の上に立って、第10章においては改めて「再帰-自発-受動」という拡張の流れを考察した。「再帰」から「自発」への拡張過程において、一貫して二項述語から一項述語に向かう収斂がなされてきた。だが、**se briser**「こわれる」、**s'éteindre**「消える」等のプロトタイプの「自発」の段階に至って、それ以前の段階とは異なり、「外的原因（外的使役主）」が導入されることになる。これによりこれまでとは逆の方向の二項述語に向かって広がっていく可能性、すなわち「受動」に向かう可能性が生れたのである。

第3部においては、受動的用法に焦点を絞って分析を行った。上でも述べたように、フランス語の受動的代名動詞には英語などにみられる中間構文に相当するものと、それとは異なる振る舞いを示すものがある。筆者はこの後者を「未完了受動型」と呼ぶ。(3)がその代表的な例である。

(3) **Le vin blanc se boit frais.**

「白ワインは冷やして飲まれる/飲むものだ」

中間構文は、よく知られているように「可能のモダリティ」を含意するが、未完了受動型は日本語訳が示すように、「習慣」や、「規範のモダリティ」を表すことが多い。そのほかにも動作主指向の副詞的表現との共起可能性など、いくつもの相違点がみられる。本論文においては中動のカテゴリーの機能拡張という観点から、この二つのタイプの受動的代名動詞の位置付けを行った。中間構文型がひとつ前の「自発」に近い段階にとどまっているのに対して、未完了受動型は「受動」の領域に大きく踏み出しているのである。また、フランス語には見られないが、スペイン語やイタリア語、さらにはスラヴ語派のポーランド語などにみられる「非人称の**se/si/się**」という用法は、当該言語の「未完了受動型」から拡張した可能性があることを示した。

歴史的な観点からしても、フランス語の代名動詞において「受動的用法」が誕生した時期である、中期フランス語の用例をBrunot(1966, 1967)が挙げているが、この段階においてすでに、中間構文とは異なる、「受動」の機能に特化された用例が少なからず見られるのは興味深いことである。

なおポーランド語には、第13章で分析した与格を伴う非人称再帰構文もある。これは一般の「非人称の**się**」とは性質が異なり、むしろ中間構文に近いと思われる側面もあって、再帰動詞の興味深さを改めて感じさせられる。

第14章では、「叙述の類型」および「総称性」に基づく分析を行った。受動的代名動詞の大部分のものが「総称文」であることには異論はない。ただ「属性叙述文」であるかという点、必ずしもそうとはいえない。以下の(4)は総称文ではあるが、属性叙述文ではない。未完了受動型には、このようなタイプのものもかなり見られる。

(4) **Les livres se vendent bien cette année.** (山田 1997)

「今年は本がよく売れる」

益岡(1987)は叙述の類型を非連続的なカテゴリーではなく、連続的なものとしてとらえ、日本語の例ではあるが「非内在的属性叙述文」と「静的事実叙述文」の中間的性格を持つ文なども存在すると言う。フランス語の受動的代名動詞についても、特に未完了受動型のものには、そのような中間的な性格のものがみとめられる。

第16章から18章までは、受動的代名動詞は非対格か、それとも非能格かという観点から分析した。この問題には「個体レベル述語/ステージレベル述語」の区別も関わってくるものであり、その点において上記の「叙述の類型」とも関連してくる。

生成文法の枠で書かれたLekakou(2005, 2008)は、中間構文の意味論として非常に興味深いものである。だが、Lekakouの分析の持つ「主語指向性」は、未完了受動型のみならず中間構文型においても、フランス語の受動的代名動詞とは相容れないところがある。この点については、第19章において述べた。

「叙述の類型」、「総称性」、そして「主題」は、互いに関連を持ちながら、独自の領域を持った概念ということができる。さらに「モダリティ」も、これらと密接なかかわりを持つものとして、加わってくる。機能拡張の観点からいっても、中間構文型の受動的代名動詞が含意する「可能」のモダリティは、ひとつ前の段階の「自発」から受け継いだものであると言える。フランス語の代名動詞は、これらが絡み合う興味深い言語現象なのである。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (井 口 容 子)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	井元 秀剛
	副 査	准教授	高橋 克欣
	副 査	教授	田村 幸誠

論文審査の結果の要旨

井口容子氏の博士論文『中動態としてのフランス語代名動詞 — 再帰・自発・受動 —』は、フランス語の代名動詞という長年議論されてきた言語現象を、意味論・統語論・類型論の観点から総合的に再検討し、「再帰」から「自発」、さらに「受動」へと至る機能拡張の過程を理論的に位置づけた大規模な研究である。本論文は、個別言語の詳細な記述にとどまらず、一般言語学的課題にも直接関与するものであり、現代言語学における中動態研究および反使役研究に対して重要な貢献をなしている。

本論文は三部構成をとる。

第1部「再帰と中動」では、まず第1章においてフランス語代名動詞の諸用法をKemmer (1993) の枠組みに基づいて体系的に整理し、伝統文法における分類との対応関係を明確にしている。この章は、既存の記述を単に紹介するのではなく、再帰構文の意味機能を連続体として捉える視点を提示し、本論文全体の理論的基盤を与えるものである。第2章では、「再帰」から「身体動作の中動」を経て「自発」、さらに「受動」へと至る再帰標識の機能拡張の過程を、Kemmer (1993) および柴谷 (1997) を中心とする先行研究を精査しながら再構成している。この議論は、形式と意味の対応関係を歴史的・類型論の観点から捉え直すものであり、フランス語における再帰標識の位置づけをより広い言語類型の中に置く試みとして評価できる。第3章および第4章では、従来「受動的代名動詞のアスペクト制約違反」とされてきた事例を詳細に検討し、それらが「自発」と「受動」の境界領域に位置する現象であることを示している。ここでは実例に基づく緻密な分析が行われており、理論的仮説を実証的に支える重要な章となっている。

第2部「フランス語における使役交替と非対格性」では、反使役構文の形態的実現と意味構造の関係を多角的に分析している。第6章では、「外因性／内因性」および「完了性／未完了性」という二要因が非対格性と密接に関係することを論じ、非再帰形態をとる反使役動詞が相対的に低い非対格性を示すという仮説を提示している。さらに程度到達動詞に焦点を当て、語彙意味論の枠組みによる精緻な分析を行う点は、本研究の独創性を示す部分である。第7章では生成文法のミニマリスト・プログラムに基づくDoron & Labelle (2011) の分析を取り上げ、統語的説明の利点と限界を冷静に評価している。第8章ではMartin & Schäfer (2014) の主張を再検討し、「内的原因」という概念の再細分化を提案することで、従来否定されてきた形態と意味の対応関係を再評価している。第9章では様態・結果相補性仮説 (Rappaport Hovav & Levin 2010) を参照しつつ、反使役構文の意味構造をさらに理論的に深化させている。第10章ではこれらの議論を統合し、「再帰—自発—受動」という拡張の流れを理論的に再整理することで、本論文全体の中心的主張を明確化している。

第3部「受動的代名動詞と総称性」では、受動的代名動詞を「中間構文型」と「未完了受動型」に区分し、それぞれの意味的・語用論的特徴を詳細に検討している。ロマンス諸語およびスラヴ諸語との比較は、フランス語の個別現象を言語類型論的視点から捉える重要な試みである。第12章以降では、「総称性」「叙述の類型」「事象の複数性」「モダリティ」といった理論概念を導入し、受動的代名動詞の意味構造を多面的に解明している。特に第14

章における叙述類型の分析は、統語論と意味論を架橋する試みとして高く評価できる。第16章から第18章では非対格性の問題を再検討し、英語との対照を通じてフランス語中間構文の統語的性質を明確にしている。終盤の章では中間構文の意味論的分析を再評価し、形式意味論的手法による記述を試みている。終章ではこれまでの議論を総括するとともに、今後の研究課題が提示される。

本論文の最大の成果は、フランス語代名動詞を単なる文法項目としてではなく、意味拡張の連続体として捉え、その背後にある普遍的原理を明らかにしようとした点にある。筆者は30年以上にわたる研究成果を統合し、フランス語のみならずスペイン語、イタリア語、ポーランド語などとの比較を通して、一般言語学的視野から問題を再構築している。このような包括的研究は国内外を見渡しても稀であり、専門分野に対する学術的貢献はきわめて大きい。

一方で、本論文は個別に発表された研究を基礎として構成されているため、全体の理論的枠組みにおいてなお整理の余地が残されている。特に「自発」と「反使役」の用語運用や、「中動態」「中間構文」「非対格性」といった主要概念の定義については、さらなる明確化が望まれる。しかしながら、これらの課題は本研究の本質的価値を損なうものではなく、むしろ今後の理論的発展に向けた建設的課題と評価できる。

以上を総合的に判断すると、本論文はフランス語代名動詞研究の新たな基盤を築くものであり、意味論・統語論・類型論を横断する重要な学術的成果である。よって本論文は博士（言語文化学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。